

護雅夫著

古代トルコ民族史研究 I

村山七郎

護雅夫博士の「古代トルコ民族史研究I」と題する突厥史研究が一九六七年三月末山川出版社から出版された。序文九ページ、目次、凡例のほか本文五六ページ、英文目次、英文要約二五ページの大著である。従来発表された諸論文を集めたものであるが、発表の年月順によらず、内容によつて配列し、刊行に当つて相当の補正が加えられ、全体の統一がよく保たれている。

歴史的研究である本書について、歴史家でない私が書評を書くことは、盲蛇におじずのそしりをまぬかれたいことは十分承知しているが、著者が稀に見るほど該博な言語の知識を所有し、従つて本書はフィロソフィカルな著述でもあるので、あえて一言語学徒の立場から本書について卓見を述べることをゆるされた。

序文にあるように、「白鳥庫吉、羽田亨両博士によつて基礎づけられ松田寿男、岩佐精一郎、小野川秀美などの諸先学によつてうけつがれ、つちかわれてきた突厥史研究の輝かしい伝統(六ページ)を著者がうけついでいることは言うまでも

ない。そしてトルコ・フィロロギーをきざぎざあげた三巨星デ・ンマークのトムセン、ロシアのラドロフ(ドイツ人)、ドイツのバングの業績に精通しているばかりでなく、その後継者たち、ドイツのフォン・ガベン、トルコのアラト(ともにバングの高弟)、ソ連のマールーフ(ラドロフの高弟。マールーフの伝記及び業績、論文目録はマールーフ古稀記念論集「Tinkolobicheskii Sbornik Moskv, Leningrad一九五一年の巻頭論文イェ・イ・ウブリャトワ「マールーフの学問的及び社会的活動」にくわしい)、フォン・ガベンの弟子ブリツァク(ウクライナ生れ、現在ハーバード大学教授)、ロシア、ソ連のトルコ・フィロロギーの伝統をうけつぐクリヤシュトルヌイ(レニングラード、アジア諸民族研究所)、トルコ共和国の突厥記録研究家オルクン、スメル、オエゲル諸氏、さらにボン大学でシナ学を教えている奉天生れの、日本人と同じくらい日本語の上手な劉茂才の研究にも精通しておられる(劉茂才氏について言えば氏は突厥史研究の業績によつてボン大学でハビリティーレン、つまり正教授^{オプフェニヒャー}になる資格を獲得された。一九六五―六六年私の滞独中、劉氏は東洋人としてドイツの大学でハビリティーレンした最初の東洋人として学界で大評判であった。実際は私のベルリン時代、友人故肥沼信雄氏が一九四三年にベルリン大学医学部でハビリティーレンしたから、劉氏は東洋人として二人目である)。

これらの、トルコ・フィロロギーの発展に貢献した、また現在貢献している研究者たちの仕事を理解するには、どれほどひろい、そしてふかい外国語の知識が要求されるであろうか！護氏は英、独、仏、露語の文献を自由に読むだけでなく、現代トルコ語（トルコ共和国の国語）で書いた文献にも実によく目を通しておられる。しかも護氏の強みは単に読むだけでなく、自らトルコ語で論文を書き、トルコ語を自由に話す点にある。トルコ系言語を研究する日本の言語学者の中でも護氏はどトルコ語を自由に話す者は他にいないと私は断言する。（代々木大山町一一六のトルコ小学校の校長としてイスタンブールから赴任して来られたスッドック・ウングン先生は「モリ・ペイのようにトルコ語を上手に話す日本人はいない」と私に話す）護氏はソ連やドイツのトルコ学者と話するときには常にトルコ語によると聞いていた。現代トルコ語に関する確実な、豊富な知識は護氏の古代トルコ民族史研究の土台となつてゐる。トルコ系の言語は、ヤクト語とチュワシ語を除けば、歴史時代において、アイスランド語ほどではないとしても、きわめて緩慢な変化を示したにすぎないからである。現代トルコ語と突厥語との間の距離は意外に小さいのである。したがつて、現代トルコ語のエスプリを理解される護氏は、古代トルコ語のそれをも理解するのである。

現代欧州諸語、それと同時にトルコ諸言語に通じている学

者は日本でこそ稀であるが、ソ連やドイツやフランスやトルコ、またアメリカでは稀であるとは言えない。とくに、トルコ共和国以上にトルコ系民族を擁するソ連ではそのような学者が少なくない（尤もソ連では最近、欧州諸語に通じている学者の数は少なくなりつつある。ソ連のトルコ学者は以前はとくにドイツ語が非常に強かつたが、現在はそうでない。クリャシュトルヌイ氏のごときでもドイツ語は話せない）。

現在、各国のトルコ学者は（アラブ、イラン、アルメニア語に関する知識を除外すれば）言語知識において右のようなものだろうと思う。しかるに護氏は中国文献学の深い知識——古代トルコ民族史の研究にとつて不可欠の——をもつておられる。この点が欧米、トルコ共和国のトルコ学者の羨望の的である。

現在、突厥史の研究においてボン大学の劉茂才氏とトルコのオエゲル氏とは対蹠的な立場にある。前者は中国語史料の理解にすぐれているがトルコ語資料の理解は深いとは言えず、後者はトルコ語史料の理解にすぐれているが中国語史料の理解は深くはないと言われる。しかるに護氏の場合、中国語史料もトルコ語史料もともに深く理解しているのである。

さて、護氏の著作は第一編 突厥の国家と社会、第二編 突厥第一帝国における官称号の研究、第三編 突厥碑文劄記、附編（クリャシュトルヌイ、劉茂才、オエゲル、マローフの

研究の紹介、批評)より成る。第一編を構成する四つの章は「古代史講座」及び「古代学」のために書かれた、どちらかと言えばやや啓蒙的な性格を帯びたものであるが、この種のものを書かれる場合にも護氏の学問的なきびしい態度がたぬかれる。突厥国家を構成する諸要素を表わす用語の意味が徹底的に究明される。この究明によつて私のように歴史のセンスに乏しい者まで、突厥の国家と社会に対する理解が与えられる。本編はトルコ語史の学徒にとつても非常に有益と信ずる。

第二編はカガン、シャド、エルテベル、イルキンに関する三つの章から成るが、これらをたとえばブリツァク氏の論文「アルタイ諸民族の種族名と官称号」(Omeljan Pritsak. *Stammennamen und Titulaturen der altaschen Völker. Ural-Altaische Jahrbücher. Bd. XXIV, Heft 1-2, 1952, SS. 49-104.*)と対比して見れば、護氏の分析が如何に鋭く、詳細であるかが知られるであろう。今後、なにびとがオルホン碑文のトルコ語を歴史的に又は言語学的に研究するにしても、護氏の本編を無視することはゆるされまい。

第三編は歴史家としてよりもフィロロゲとしての護氏の面を強く表わしている。第一章「突厥の啓民可汗の上表文の文章」は、上表文中の幾つかの表現がオルホン碑文のトルコ語の表現に酷示していることを詳しくフォロース、「それらの

諸表現を、そのチュルク語の翻訳、中国語的改訳と考えることは、ごく自然ではないであらうか」と結んでいる(四六六ページ)。ペリオ、F・W・K・ミューラーが著手した仕事が深くほりさげられ発展させられている。

私としては元典章の中国文のモンゴリズム(吉川幸次郎、田中謙二、元典章の文体、校定本元典章刑部第一冊附録)の類型的先駆者をここに見出すことが出来て、とくに興味をそそられた。

第三編第三章「契丹の語源」は愛宕松男氏の説を鋭く批判したものであるが、これについては後に述べる。

第四章において著者はイエニセイ碑文に見える二つの単語 *quy* と *öz* との意味に関する諸学者の見解をくわしく検討し、前者を「溪谷の平地、川岸」、後者を「二つの山の間にある溪谷」とするトルコの学者オルクン、スメルの説をトゥルフアン文書、中国資料、カシユガーリーのトルコ語辞典によつて確実に行っている。オルクン、スメルによつて提出された説は護氏による根本的な検討と重要な補足によつて、はじめて定説化の土台を与えられたのである。この点における著者の貢献はけだし絶大である。フォン・ガベン先生は護氏のこの貢献を非常に高く評価している旨を私に語ったことがある。

附篇は決して附録的なものでなく、その諸論文は護氏の研

究の態度、批判的精神を見事に示す雄編である。トルコ学研究者にとつてきわめて有益な編で私にとつては本書のうちで最も興味のある部分である。

さて以下において、考慮の余地がなからうかと思われる本書中の説のいくつかについて意見を述べて見たい。

(1) Täpni täg täpni-dä bolmıŝ について

護氏はその大著の冒頭においてオルホン碑文から次の文を引用される。

「天 (täpni) のごとき、天にて生れしチュルクのビルゲ (賢き) Ⅱ カガン (Bilgä-qayan) が、君長の位 (böd) になれ即きたり……」(二三—三)。

突厥字で書かれた原文は、ビルゲ・カガンまでは次のように転写される。

Täpni täg täpni-dä bolmıŝ türk Bilgä-qayan……

護氏の訳は一般に行われている訳とちがいはない。マールフも「古代トルコ文献集」(二三—二四)においてはじめの部分を「天の如き、天生の(本来は「天において」又は「天から」生れた)チュルクのカガン……」と訳している(ビルゲが脱落している)。

護氏は「天のごとき、天にて生れし……」のところに註を付して「天のごとき」でもありうる。täpni-dä の +dä は、

Lokativ 格語尾たるとともに、Abativ 格語尾として用いられたから、täpni-dä は「天より」とも訳せるが、ここでは、一応、+dä を Lokativ 格語尾にとつておく」と述べられる(五〇—五二)。氏は「天のごとき」と「天のごとき」とのうち前者をとり、後者も可能としたわけであるが、もし「天のごとき」とした場合、この文がどのように解されるのか、ということについては述べておられないのは残念である。

私にとつて納得できないことは、護氏やマールフ氏が bol- を「生れる」と訳すことである。オルホン碑文では bol- は「成る」(英語の to become に当る)の意味に用いられており、必ず補語(英文法家ならそれを主格補語 subjective complement と呼ぶだろう。He became rich. He became a merchant. 下線の部分が主格補語)が先行している。従つてこの場合だけ主格補語をとらない筈はない。それではこの場合、何が主格補語か。täpni täg 「神の如く」がそれであるまいか。主格補語と bol- 「成る」との間に täpni-dä ということが入つたために、täpni täg の補語性が不明瞭となつたのではないか。täpni täg bolmıŝ は「神の如くに成つた……」「神に類せるもの、神と同じようなものに成つた……」の意味でなからうか。しからば、täpni-dä はどういう意味かと言へば「神より」(つまり「天佑によつて」「神助によつて」)を意味する。かくて、全体は「神のように、神によつて、成

つたチュルクのビルゲ・カガン」の意ではないか。わかりやすく言えば、「天佑神助によつて神のように成つたチュルクのビルゲ・カガン」の意ではないか。「天佑を保有する天皇」という表現に近いのではなからうか。

これと同一思想を表わすもう一つのビルゲ・カガンの修飾句はオルホン碑文に見られる *Täyri täg täyri yararnış türk Bilge-qayan sabim* である。

この文をソ連のゲ・ガイダーロフは「天の如き、天によつて置かれた(又は天に適つた)チュルクの賢いカガン、私のことば」とロシア語に訳してゐる (G. Gaidarov. *Jazyk orxonskogo pamjanika Bilgelagana. Alma-Ata, 1966, 76 ページ*)。卓見を以てすればこの訳文も正確ではない。護氏は *täyri yararnış* を「天の創りたる」と訳されるが(四七六ページ)、オルホン碑文では *yarar* は「整える」の意味に用いられ、「創造する」の意味には用いられていないとおもう。

この場合にも *Täyri täg* は補語であるが、*yarar* の目的格補語 *objective complement* (英語に例をとれば *I made him happy*) であらう。この句は「神の如くに(神に似たうなものに)神がつくつた(整えた)チュルクのビルゲ・カガン」の意味でなからうか。

参考までにあげておけば、ラドロフは「トルコ方言辞典」第三卷一一一ページにおいて、*yarar* に対して「適切なもの

にする」とのえる (machen, dass Etwas passend, tauglich, schicklich ist, einrichten) の訳を与えてゐる。そしてこの動詞をあくむ二例を示してゐる。

Qırqız budunı jaratıp kätimiz “Wir richteten das Kirgisenvolk ein”

Täyri jararnış Türk-Bilge-Qayan “der von Himmel eingesetzte Türk-Bilge-Kagan”

第一の例において、ラドロフが *Täyri täg* をはづいてしまつたのはミスであらう。それがなくては *yararnış* は死んでしまふから。

右の二つの句は、護氏が指摘しておられる沙鉢略可汗の上表文のなかにある「チュルク語の根柢をもつと思われる」突厥自天置以来、五十載」という句(四七六ページ)と関係がある。自天は「天より」の意味であつて、*täyri-da* の *-da* を解釈するに當つて重要である。*täyri-da* は「天空において」でなくて、^{テンギス}「神より」≡「天佑により」「神助により」の意味であらう。つまり *+da* を *Ablativ* の機能をもつ接尾辞とわれわれは見る事ができるのではあるまいか。

ここに取扱つた二つの句と関連して、護氏が四四一ページ以下に述べていることにも触れてみたい。突厥の沙鉢略可汗が隋の文帝におくつた上書の一つに「從天生大突厥天下賢聖天子……」とある(四四一ページ)。ここに見える從天生をべ

リオは *tägrida bolmiš* 「天より生れし」と解し(四四一ページ)「ミャラー (Müller, F. W. K.) は *tägrida bolmiš* となし、ヘリオはこれを回鶻の可汗の称号に付された *tägrida qut bolmiš* から類推したものと見ている(四六七ページ)。護氏は最後の句を「天にて(より) 果報を得た」意とされる (*bul-* は「見出す」意である)。ところが *tägrida bo(u)lmiš* の場合には右に挙げた句における *qut* (幸福・幸運・果報) のような目的語はない。「したがって、これは *tägrida bolmiš* (天にてへより得た) ではなく、*tägrida bolmiš* (天にてへより生れた) であろう、と思われる」と護氏は述べる(四六七ページ)。そのほかにも興味あることが述べてあるが割愛する。しかし卑見によれば、*tägrida bolmiš* には補語乃至目的語が無いと見るのは従来の研究者の誤解であり、前述のように「神の如くに「成つた」のである。*Tägrida qut bolmiš* という転写も卑見によれば誤りであつて、*Tägrida qut bolmiš* 「天佑(神助)により幸運になりたる」の意である。*qut* は *bul-* の目的語でなく、*bol-* の主格補語である。中国人がそれを「天上得果報」と訳したのであつて得から出発して、*pē, waw, lamedh* とつづられた動詞幹を *bol-* (成る)でなく *bul-* (見出す)と転写する必要はなからう。オルホン碑文にある *kärgäk bolmiš* もヤローフは *bolmiš* かも知れないと見て動揺を示しているが、これまた「終りにな

つた(没した)であろう。

「補語」の概念を導入することによつて、カガンの一連の修飾辭は統一的に解釈されたと私は考える。

ビルゲ・カガンの修飾句とは直接の關係はないが、元朝秘史の冒頭にある次の文は間接の關係はあると思う。

上	天	処	命有的	生丁的	蒼色
送額列	騰格理	額扯	札牙阿禿	脱列克先	孛兒帖
舌	舌			舌	

狼 有

赤那 阿主兀

「上天より命ありて生れたる蒼き狼ありき」。

(那珂通世訳「成吉思汗実録、東京一九〇七年、一ページ)

tägrin 「神」が *Lakativ* でなく *Ablativ* にある点に注目される。蒼き狼が生れたのは天空であることは示されていない。神からの命によつて生れたのである。

突厥人は皇帝が神からの命をうけて生れたとは考えていたであろうが、天上で生れたとは考えなかつたであろう。突厥人にとつて、カガンは神によつて神に似たものとしてつくられたものであり、地上における神の似姿であり、カガンの凡ゆる権力は神より発すると考えていたのである。

突厥人の宗教観を理解する上にも、ビルゲ・カガンの修飾

句の正しい理解が不可欠と思われる。

(2) シャドを表わす「察」について

突厥における重要な称号であるシャド *šad* は漢字「設」「察」「殺」「慾」によつて表わされるとされている(二三ページ)。「設、殺、慾」は声母から見てシャドを表わすことが疑われない。しかし「察」はどうだろうか。声母から見てシャドという音を表わすために用いられているとは考えられない。「察」はシャドの音訳でなくて、音声面をも考慮した意訳ではなからうか。ちょうどドイツ人がギリシャ語起源の *Symbol* を、音声面をも考慮して *Simbild* とも意訳していることなどに類するものではなからうか。

(3) 莫縁について

啓民可汗が隋の文帝にたてまつった上表文の冒頭で文帝は聖人先帝莫縁可汗と称されている。著者はこの莫縁が「古代チュルク語単語、しかも、なんらかの美称の音写である、と考える」と述べておられる(四五ページ)。しかし、『そのもとのチュルク語単語がいかなるものであつたか、わたしは、これを確定することはできないが、とにかく……「莫縁可汗」の「莫縁」とは、古代チュルク語におけるなんらかの美称にはかならず、と思う』とも述べられる(同上)。護氏によれ

ば、ボン大学の劉茂才氏は「莫縁可汗」の意味について、つぎの四説が可能であるとされている。

(1) 限界(つまり縁)のない可汗、すなわち、いつてみれば無限の国土を支配する可汗。

(2) (良い)めぐりあわせ(縁)を持たぬ可汗。

(3) 仏教的には *pratyaya* (縁)のない、*pratyaya* からまぬがれた可汗。

(4) しかし、「莫縁」はおそらくまた、古代チュルク語単語の音写でもあり得る。ウイグルの可汗の名前「磨延巽」の「磨延」はベリオによつて、モンゴル語で「富んだ、幸福な」を意味する *Bayan* に比較された。自分「劉茂才氏」は「莫縁」を「磨延」の異形であると推定する(四四四ページ)。

劉茂才氏のあげる(1)(2)(3)は莫縁という漢字が表意的に用いられているという立場であり、(4)は表音的に用いられているという立場である。護氏は(4)に賛成しておられる。つまり莫縁表音説をとつておられる。氏はベリオが、莫縁はモンゴル語の *bayar* 「富んだ、富裕」に関係があると考えていたろう、となし、当時のトルコ諸語では「富んだ」の意味を表わすことばは *bay* のはずであると述べベリオ説を批判している(四五ページ)。護氏の指摘はまったく正当である。ただ残念ながら自説を提出されていない。私は、音声面から見て莫縁と磨延とは同一のトルコ語単語を表わす可能性は小さいだ

ろうと見る。莫縁は、^い個のトルコ語単語を表わすとはかぎらない。私はそれは Bak^{バク} yan^{ヤン} Yang^{ヤン}「強い形・法」ではないかと考える。yang は「様」の音である。マローフは古代トルコ語 yang に対して「形象^{オウゾク}」「形^{フタヘ}」「様式^{サマシキ}」「法律^{ザク}」の意味を与えている（エス・イエ・マローフ「古代トルコ文献集」モスクワ・レニングラード一九五一年、三八四ページ。S. Je. Malov Pamianiki drevnejurkskoj pis'mennosti）。他方中国語の「文」は「かざり、象形文字、外觀、法律」などの意味をもつ。莫縁は文帝の「文」の古代トルコ語訳ではなからうか。

ついでながら、中国語音の ng がトルコ語において消滅したり又はロとしてあらわれる例はフォン・ガベン「古代トルコ語文法」の最後にある語彙からでも次の例をあげることができる。

義浄	gitso
平	pi
庚	qī
公主	qunčuy
三蔵	samtso
定	tī, tii

(4) トニョククを中心として

トニョククに関する著者の見解は「クリヤシュトルヌイの突厥史研究」(五五七ページ以下)に述べられている。著者は

批評と紹介 村山

嗽欲谷(ついでながら著者は「Tonyuquq」と転写するが、「欲」の中古音価——藤堂明保氏の「漢字の語源研究」(三〇五ページによれば、^いyo^イ不^フ喻^ユ燭^{ゾク}開^カ4——から見て「Tonyuquq」と転写した方が適切ではないかと考えられる。「谷」の中古音は ^{バク}ba^バである。藤堂氏の著作、三〇五ページ参照)を阿史徳元珍と同一人物と見るドイツのヒルト、ソ連のクリヤシュトルヌイ説に賛成しておられる(……阿史徳元珍が「Tonyuquq 嗽欲谷その人にはかならぬことは、……動かぬところである、と考える」、五六五ページ)。しかし護氏はリクヤシュトルヌイが「Ton」を「最初の第一子」「元」を示すという点はいとしても、「yoq-uq」/「yuquq」「珍」となす考えには疑問を投げかけておられる。ク氏は動詞幹 yuq- (ついでながらフォン・ガベン先生の「古代トルコ語文法」では動詞幹にはマイナス印が、名詞、形容詞幹にはプラス印が付けてある)に「重んじる、評価を高める、保管する、保存する」という意味があつて yuq-uq は「大切なもの、珍らしいもの」の意味をもつとなすが、この点が疑わしいと護氏を見る。『……tunfon は「最初の」という意味をあらわすと考えることが許されるならば、これと「元」とを対置させることは、かならずしも無理ではないかもしれぬ。ただ問題になるのは、^イyo^イに、「重んじる・評価を高める・保管する・保存する」という意味が確かにあつたかどうか、という点である。クリヤシュトルヌ

イは一ウイグル文法律文書にただ一例だけ見える *yog-lyug-* を、マロフが「重んじる・尊重する・保存する」などと訳しているただそれだけによつて、*yokuk* \searrow *yuguk* は「珍」に当る、としたのであるが、そのような意味をしめす *yog-lyug-* の語は、それ以外の資料には絶えて見えない。わたしが、阿史徳元珍の「元珍」は、まさに *tonyuguk* というチュルク語の漢訳であるというクリヤシトルヌイの意見に、まだ充分納得できぬのはこのためである』(五六五ページ)。

卑見によれば、*yog-lyug-* は明らかに *yog-n-s* 「上昇、高み」によつて証明され(5)についてはフォン・ガベン「古代トルコ語文法」三〇節参照)、さらにトルコ語方言の *yogari* 「上」の語根 *yog/lyug* にも見出され、その前母音的ヴァリアント *ydk* は *yüksä* 「高まる」*yüksäk* 「高」にも見出される。私は *yog-lyug-* に「高める」の意味があり、*yog-n-q* は「高められるもの」「尊重されるもの」を意味し、従つて「珍」に対応すると考える。こう見てくると、ク氏の説に対して著者が投げかける疑問の一部は消えるのではなからうか。

また護氏は、瞰欲谷と元珍とが同一であるとす説が『字界におけるその地位を確立しうするためには、岩佐氏のこれに対する反対論の(4)つまり *Boyla-baga-targan* と *Apa-tar-gan* との関係について、万人を納得させるにたる結論が得ら

れねばならない。わたしは、これについて、べつの論稿を用意しているが、いま、ここで、これについてくわしくのべる暇がない。これに関する考証は、本書の続巻にゆずりたい』(五六四、五六五ページ)とのべられる。著者がこの点について考えを述べられなかつたのは残念である。要点だけでも発表されることが望ましかつた。私としては、この関係の問題は簡単に解決されると思う。 *Boyla-baga-targan* は正式の名であり、*Apa-targan* は愛称形にはかならないと思う。後者は「長老タルカン」「親父タルカン」くらいの意味であらう。

現在のトルコ諸方言では *apa* は「姉」を意味する。(護氏や私たちの先生であるフォン・ガベン教授を私たちや各国のトルコ学者は *Maryam apa* と呼んでいる。「マリア姉」の意味である。私への手紙にはフォン・ガベン先生はこの愛称をサインされる)しかし、バシキル語の東部諸方言では *apa* は「伯父」「おじさん」を意味するという(エリ・ア・ボクロフスカヤ「トルコ諸言語における親族呼称」三二ページ L. A. Pokrovskaya. *Terminy rodstva v tjurkskix jazykax. Istorickoje razvitije leksiki tjurkskix jazykov*. M. 1961) 突厥字イェニセイ碑文では *apa* は「父」を意味する(マロフのイェニセイ碑文研究におさめられている碑文第十八、第二十に見える)。オルホン碑文では *acım apam* (護氏は「

三五ページで「わが祖宗」と訳す」という熟語が見える。兩碑文やバシキル方言における *əwə* の使い方から見て、突厥においてこのことばが「父、親父、長老」を意味したと見られる。ボイラ・バガ・タルカン¹⁾は長老だつたので、「長老タルカン」とも愛称されていたであろう。

かくて噉欲谷と元珍とを同一視する説が確実となるための条件がみたされたとおもう。

噉欲谷と噉泥孰(又は熟)との関係(五六一ページ)については護氏は説を出していないが、私は *Ton-yo-n-aq* / *Ton-yo-n-aq* が *Ton-yo-n-s* / *Tonyo-n-s* とも呼ばれ、後者は噉泥孰と表わされたのではないかと思う。*yo-n-s* はラドロフ「トルコ方言辞典」第三卷四〇三ページに出ているクリミヤ方言、オスマン語、ジャガタイ文語の単語であり、「上昇、高み、傾斜」の意味が与えられている。

(5) 六州胡の問題

護氏はクリヤシュトルヌイがオルホン碑文に出てくる *altu cub soqdaq* を「六州胡」のトルコ語訳と解することについて、この問題をク氏が「まったく新しい観点から見なおしたものとして、高く評価されねばならぬであろう」と述べられる(五七一、五七二ページ)。私はク氏の説に関しては「高く評価されねばならぬであろう」という評価では十分でないとい

おもう。これまで *cub* と転写されてきたこのことばは、突厥字が *o* と *u* とを区別しないことを考慮すれば、*ov* と転写してもよかつたのである。突厥字では有声両唇摩擦音 *v* を表わす文字は無かつたが、これは語末においてこの音が突厥語に無かつたことを必ずしも意味しない。語末においては *v* が存在し、それが *b* を表わす文字によつて表わされた蓋然性がきわめて高いのである。そこで、*cub* と転写されてきたことばは *ov* と転写することもできるとおもう。「州」の中古音は *ʈuon* であり(藤堂明保氏、前掲、一七六ページ)、簡略には *ov* と転写でき、これは突厥碑文の *cob/ov* と酷似している。そこで *altu cub soqdaq* (*altu cov soqdaq*) は六州胡を表わすというク氏の説は正しい。ク氏の説は定説となることを私は疑わない。したがつて護氏による評価は控え目すぎるとおもわれるのである。

altu cub soqdaq の *cub = cov* 「主」は突厥文字の音価にもふれる問題であり、この資料によつて、これまで後母音語に用いられる *b* とされて来た突厥字が語末で *v* をも表わすことが明らかとなるのである。従つて「家」、「水」を表わす突厥語はこれまでそれぞれ *əwə*, *suw* であると見られて来たが、*əwə*, *suw* であつた蓋然性がここに明らかになつたわけである。

(6) 契丹の問題について

「契丹の語源について」(四九四ページ以下)は愛宕松男氏の契丹語源考を批判されたものである。オルホン碑文に出て来る *qian* (q, は口蓋化した *n* を表わす) の *n* に對する愛宕氏の不十分な理解を批判されており、この批判は正當とみとめられる。ただこの点だけについて言えば、この批判はとくに独創的とはみとめられない。*n* の問題は学界においてこれまでかなり取りあげられているからである。私の知るかぎりではフィンランドのトルコ学者レネン氏が「トルコ諸語音韻史資料」(Martti Räsänen. *Materialien zur Lautgeschichte der türkischen Sprachen*. Helsinki 1949)において最も系統的に取りあつてゐる。またアルタイ系統諸言語の *n* については、ポッペ先生が「アルタイ諸言語比較文法第一部比較音韻論」(N. Poppe. *Vergleichende Grammatik der altaischen Sprachen*. Teil 1. *Vergleichende Lautlehre*. Wiesbaden 1960, S. 70 ff.) にあつて論じておられる。アルタイ系統の諸言語においては *n* が語末に立つことはなかつたらしいとポッペ先生は見えておられる。卑見によれば突厥語の *n* は幹収縮の結果生じたものである。

さてこの *n* の理解が不十分なためその議論に説得力が不足していたとは言え、義州万仏洞の造窟刻文(西暦五〇二年)

において契丹が奚丹と表わされているところから、契丹の契は奚であるとする愛宕松男氏の説は興味があると思う(ただし、キタン、キタイの中にモンゴル語の接尾辞タン、タイを見ようとする愛宕氏の説に對する護氏の批判は正當である)。護氏は愛宕説を批判するにとどまつて、自説の展開までは試みなかつた。そもそも民族呼称の起源はきわめてむづかしい問題であり、護氏はかろがろしく仮説を提出することをさしひかえたのであらう。ところで私も契丹の起源にかんしてこれと言つた考へはないが、モンゴル語の *qonin* (< **kon'in* 「羊」と古代トルコ語の *qon* 「羊」との関係から、*qian* に對して、いつそう古く形として **qian'in* を推定する。ところで *qi* が「奚」であるならば **tan'in* は何であらうか。モンゴル語にもトルコ語にも「知る」を意味する *tani* (モンゴル) *tani* (トルコ) がある。またモンゴル語にもトルコ語にも動詞幹から名詞、形容詞をつくる *-n* がある。たとえばモンゴル語の *orči* 「**urč*」に對する *orčin* 「**urč*、周囲」、古代モンゴル語の *tir* 「集まる」に對する *tirin* 「群れ」参照 (N. Poppe. *Die Nominalstammbildungsstufe im Mongolischen*. *Keleti Szemle*. Bd. 20, 1923-27. 85 及び N. Poppe. *Grammar of Written Mongolian*. Wiesbaden 1954. § 175 及び「フォン・ガベン」古代トルコ語文法」一二四節参照) **tan'in* は、モンゴル語において *-n* によつて *tani*、か

